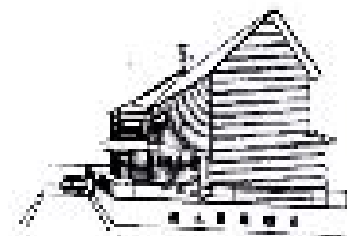


<今朝の聖書から> この議論はガリラヤで行われました。聖書は“さて”としか語っていませんので、私たちも、この論争だけから聞きましょう。初めの1~8節を見ましょう。ここでは“汚れた手で食事をする”ことについての論争が記されています。気を付けて読みたいのですが、このように論争について聖書が語る時、その論争そのものに意味があるのではなく、その論争が描き出す事実こそが、神様を指し示しているのだ、ということをお忘れなくしましょう。“レビ記”には、祭司のなすべきこととして“身を清めて聖務を遂行する”ことが記されています。私たちも、“衛生学的な”あるいは“感染症”を考えての清い(清潔)とは別に、風土がたちかかってきた長年の“不浄”ということを知っていて、それは教会の中にも“当り前の常識(葬儀の服装など)”として沢山受け入れられています。その言い伝えを知らなかったら、福音とは何の関係がなくても“恥ずかしい”思いをしたりします。初代の教会でも、ユダヤの伝統は無視できないものが沢山あったようです。ここでは“食事の時の清め”について、マルコによって説明されています。3~4節がその説明になります。この祭司の“清め”は、全ての人の日常に関わるものにまで解釈されるようになりました。このような問答に対するイエス様の答は、イザヤ書からのものでした。“この民は口をもってわたしに近づき、くちびるをもってわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、そらで覚えた人の戒めによるのである(29:13)”がその答えです。神の本質は聖ですが、その聖を強く求めることによって敬虔であろうとして、言い伝えに頼ってしまう状況は、私たちにも想像できます。私たちの教会といえども“伝統”を沢山持っていますし、習慣も沢山あります。聖書そのものにかかわるもの、私たちの救いにとっては関係ないもの、すなわちどうでもいい事、そして、関係はないけれども、人の心を大きく揺り動かす重要な事などいっぱいあります。次の9~13節は、誓って捧げられたもの(ヘブル語でコルバン)についての論争です。13節に結論付けられているように、不信仰になろうと思わなくても、それどころか、信心深く生きたいと願っている人でも、“人の作った掟”という神の戒めに反する道を歩んでしまうことがあります。14~23節でもう一度、汚れの問題について語られていますが、これらのことを通して、神様の思いに触れましょう。イエス様において、律法は人から離れ、完成されました。

週報

2009年 12月 6日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042